

一	問一	a むぞうさ	b ばくだい	c みづくろ(い)	d なぐさ(め)	e おお(い)
	問二	A アンネの日記	B 夜と霧			
	問三	略奪された多くのメガネの数に象徴される大量虐殺が繰り返されること。				
	問四	言葉では表現できない過酷なアウシュビッツでの経験を、会話することなく入れ墨された囚人番号だけで、共有できるということ。				
	問五	全員 同じ縦縞の囚人服を着せられ、髪の毛を削られ、写真においても同じ方向、同じ角度、同じ距離に頭を固定されている、というようにすべてが統一されている徹底ぶりを皮肉る意味。				
	問六	展示品の一つ一つから収容者一人一人の生活や人生を想像することで、徹底した画一的な取り扱いによつて、期待や希望を失い、意識の源泉が表れた表情に心を揺さぶられている。このように展示品から具体的な生活風景や人物像をイメージすることで、人間らしさを奪い取る戦争の悲惨さを感じ得ることができるということ。				

二	問一	a 露骨	b 操作	c 交錯	d 標識	e 表象
	問二	ア				
	問三	夏目漱石 ころも・それから・門・道草・彼岸過迄	谷崎潤一郎 細雪・春琴抄・刺青			
	問四	三四郎が目新しい東京の風景に圧倒され、驚く様子を、叙述主体である作者が、主人公を外側から観察し、概括的に説明する三人称的な視点と、主人公に寄り添った一人称的な視点とを組み合わせ、小説世界を全体的に表現すること。				
	問五	他者の心理を表現する場合に、客観的に断定することの困難さを解消するために、一般的な妥当性と話者の判断とのギリギリのせめぎ合いが生じ、三人称的な事実の提示に一人称的な判断が介入しかねない危うさということ。				
	問六	三人称的な視点と一人称的な視点とを組み合わせ、言文一致体の小説を創造していく過程は、「くた」と表現される「かつてくそこにくあつた」世界を提示する視点と、背後でそれを読み手に伝えている叙述主体の判断が同時に求められる、興味深い事実だということ。				

三	問一	ア	
	問二	五	
	問三	A オ	B ア C エ
	問四	② どうしてもっと早く私に死の覚悟を告げて下さらなかったのですか。	
		④ あの若者も、まだ宿運が尽きているわけではないので、生きるべきなのだ。	
	問五	な	
	問六	ウ	
	問七	波打ち際に白太郎金の遺体を見つけて嘆き悲しむ真鍋樽	25
		金は、自らを責めて死のうとしていた。そこへ神々しい	50
		翁が現れて樽金を引き取め、不思議な力で白太郎金を蘇	75
		らせた。	

四	問一	エ	
	問二	まさにまくをかかくべし	
	問三	河川の上に輝く月の光が窓から差し込み、部屋の明かりがわりになるうとしている。	
	問四	イ	
	問五	雁	鶴
	問六	雖 ^モ 乏 ^{シト} 声 ^ニ 格 ^ニ 、首尾匀称、足 ^ル 称 ^{ニル} 答 ^ト 作 ^ト 。	
	問七	紫式部	